慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ゲーテと教育学との関係,およびゲーテに対するわれわれの視角について
Sub Title	Goethes Verhaltnis zur Padagogik und unsere Stellung zum Dichter
Author	西村, 皓(Nishimura, Hiroshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1965
Jtitle	哲學 No.46 (1965. 2) ,p.485- 500
JaLC DOI	
Abstract	1) Goethe als einer der grossen Erzieher der Menschheit gehort der Weltgeschichte an. Die Kultur, die er abgesetzt, die versittlichende und veredelnde Wirkung, welche er in seiner Eigenschaft als Dichter und Mensch auf Mit- und Nachwelt ausgeubt hat, seine Stellung unter den Lehrern der Menschheit im grossen Stil eine Uberragende. 2) Goethe zeichnet uns nur harmonische oder komplette Menschen oder verwirklicht in seiner eigenen Person, was sonst fur die Padagogik nur Forderung und allzuhoch stehendes Ideal bleibt. 3) Ich versuche, die Ergebnisse des padagogischen Nachdenkens aus seinen mundlichen und schriftlichen Ausserungen in eine zusammenhangende Form zu bringen und ihren wissenschaftlichen Wert festzustellen. 4) Auf welche Weise gelangen wir zu unserem Ziele, wahlen wir den analytischen Weg, versuchen wir die uber das ganze Gebiet zerstreuten Gedankenperlen aneinander zu reihen und planmassig zusammenzustellen, woraus dann das Urteil abzuziehen ware, oder suchen wir auf synthetischem Weg Goethes Auffassung der Erziehung als eine Folge seiner philosophischen Weltanschauung klar zu legen? Keine von beiden scheint nach allen Richtungen hin zweckdienlich. Ich glaube, es gilt, einen Mittelweg zu vereinigen. Wir verfahren synthetisch in der Entwicklung des Goetheschen Erziehungsbegriffes, analytisch in der Darlegung der eigentlichen Padagogik. Und dabei mussen wir uns bestreben, Zusammengehoriges unter Wahrung der zeitlichen Ordnung so zu gruppieren, dass daraus auch der Entwicklungsgang, welchen Goethe in seinen Ansichten uber Erziehung gegangen ist, moglichst wie so hervorzutreten.
Notes	橋本孝先生古希記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000046-0493

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「ゲーテと教育学との関係，および ゲーテに対するわれわれの視角について」

西　村　　皓

人間性の偉大な教育者ゲーテは，実に世界史に一期を劃する人であつた．詩人として，また人間としての彼の特質が，いかに当時の人々に，また後世の人々に大きな影響を及ぼしたかは，まことに測り知れない．彼は他の多くの人間性の教師たちのなかで，派手なほどに際立つた存在であつた．しかしながら従来の教育学史家は，彼を教育学上の古典派の一人とは考えていない．なぜなら，彼がこの学問，つまり教育学の体系的形成に対して何ら貢献しなかつたし，また，彼が自己の教育に関する著作をものする場合に，その根底によく系統立てて整理された教育学的体系をもたなかつた，と判断されたからである．しかしこのような理由で，われわれはゲーテを教育学者の列から除いてしまつてよいものであろうか．

周知の如く彼は子供好きであり，子供たちによくいろいろな美しいお話をしてやつたりした．そしてその話し方も非常に優雅であつたといわれる（このようなことはやはり母親の幼年時代のゲーテに及ぼした影響を示すものであろう[1]）．こういう心情の持主であつたゲーテを想うとき，そしてあらためて彼の作品，彼の書簡その他彼の遺産を見渡すならば，そこにいかに豊かな教育的叡智と教育的関心とが混り合つているかを容易に理解することができるであろう．しかし彼の本質はあまりにも深く，あまりにも広く，彼の全体を捉えたと思つてふとみると，彼の全体はわれわれの理解を超えていつているのに気づくであろう．

ゲーテは非常に多くの著書を著わし，その著書を通して，彼の直観と概念とは，国民の思想の隅々にまで入り込んでいき，同時にまた彼の教育思想をも拡めていつた．多くの麦の種は，教育学的地盤の上に蒔かれ，そこでいよいよ広く，その蒔かれた種は芽をふいたのである．しかしゲーテには教育学的思考の全領域にわたる見解を明らかにした体系的な著書はない．もつともそれを試みようとしたことはあつた．また彼に関して，その教育思想を全体的にまとめた研究書というものもない．ただ片手間といつては語弊があるかもしれないが，すでにゲーテの生存中に，彼のことについて断片的に書かれたものに，Kayssler の "Fragmente aus Platos und Goethes Pädagogik" というのがある．[2] ゲーテの死後においては，すでに「註」において詳述しておいたように多くの，しかも重要なゲーテ教育学の研究資料が残されているが，中でも L. Hacker の "Erziehungsgeschichte Goethes pädagogischen Studien, Erlangen 1874" はすぐれた資料のように思う．

Hacker のこの著作を通覧して痛切に感じられ且つ驚嘆の念を新たにおぼえさせられるのであるが，まことにゲーテの国民に与えた影響は，強く且つ大きく，国民の精神生活に内容と方向とを与えたのであつた．他の詩人たちもそれぞれに教育および教授に対する関心を示しながらも，いずれも形式的・表面的な意見の表明にとどまつている．そして一般的にはどうやらゲーテに対する評価も，教育学に関する限り，当時の人々においては，他の詩人たちと同様に，それ並みに扱われていたようであるが，これはどうしても過少評価のそしりをまぬかれないであろう．当時一般の大衆には，ゲーテの人間およびその作品が正しく受け容れられず，ゲーテの詩の精神がよく彼らの精神の糧となりうる底のものであること，ゲーテの精神が後世にまでも主張しうる底のものであることがよく理解されなかつたようである．一体当時教養ある人といつても，その教養の由つて来たるところは学校の授業によつてのみ与えられたそれ以上には出ないものであつて，し

かも極めて表面的な，一面的なものであり，従つてゲーテの真価など到底理解されようはずもなく，全く不明瞭なゲーテ観しか持ち合わされていなかつたのである．しかもこの漠たるゲーテ観が横行していた．従つてゲーテの教育思想に対する理解も極めて皮相であり，その思想的根拠を深く追究して，そこから彼の教育論を捉えるということをしなかつたという点に，ゲーテ教育思想に対する過少評価が生じたのだと思う．ゲーテの思想を評し，紹介する人たちも，こと彼の教育学的業績については，ほんの数行をついやすにとどめているのが一般である．勿論ゲーテが教授や方法についてたびたび書いていることや，彼が自敍伝のなかで教育学的な関心を多く示していることなどはみな承知しているのである．にもかかわらず，そこからはわずかに二，三の考えを引き出して簡単に論及するといつたような，まことに熱のない取扱い方をしているのが一般である．これは何故であろうか．

哲学史における場合と同様に，彼は専門外であるからという理由で，教育学史上に彼の位置を与えることができないのであろうか．またゲーテの自由な詩的精神が体系の構成を好まないという理由でそうなのであるのか．あるいはまた，宗教的の理由で，彼は福音主義的教育学には合わないとか的をはずれている理論だという理由でそうなのであるのか．Hacker はこの欠陥を全く個人的な根拠から埋めようとした．彼は数年間，ドイツ国内で，あるいはまた外国で教師として活動し，且つこの詩人ゲーテの教育の諸原理をできる限り包括的・全体的に熟知しようと努力した．彼によれば，ゲーテこそ，精神に教育の偉大な使命が充ち溢れ，自由な広い視野と思慮とをもつたすべての人たちに対して，汲めども尽きぬ教育的刺激を与え，人間教育の宝庫の扇を開くべく鼓舞した最大の人であつた．彼はこの点を特にゲーテに対して偏見をもつている人たちに向つて強調するのである．だがわれわれは，更にこれら偏見の持主に対して問いたい．いまかりにゲーテを教育学的指導者の仲間にかぞえ入れることができないとしても，ゲ

ーテを少なくとも人間の自由な精神の啓発者として認めることは許されてよいのではないだろうか，これをしも妥当でないというのであろうか．われわれはゲーテに新たなる人間創造の精神を認めることができないだろうか．

たしかにゲーテは，たとえばルターのような宗教的教育家ではなかつたであろう．もつともある学者はゲーテを称してルターの消極的肖像となしているが[8]，しかしゲーテは，ルターとはちがつた意味において自己の生命の直接の光を武器として積極的に闘つたのである．換言すれば，ゲーテもルターと等しく，新しい世界観の劈頭に立つていたのである．

ドイツ文学の第二隆盛期の他の大家たちや同時代の哲学的思想家と同様に，ゲーテもまた偉大な改革者ルターの遺産を相続した．ゲーテはその使命を双肩に担つた．宗教改革の世を揺り動かす諸原則，ヴィッテンベルクから公布された信仰の自由，宗教上の寛容 (Toleranz) および真理への精神，これらのものはゲーテという一個の人間の，またゲーテの詩そのものの血となり肉となつた．われわれが神学上の言葉で信仰による良心の救済，弁明と呼んでいるものを——これらのことはわれわれの道徳的生活にとつては自主性と自己責任性 (Selbständigkeit und Selbstverantwortlichkeit) の対立的関係こそが重要な意味をもつているのであるが——われわれはゲーテの作品のいたるところに，明らかに強く刻明されているのを見出すであろう．人間は誰しもみな自己の行為および意志の主人であり，自己の行動自体の諸原則をみずから規定することができるが，同時にまた自己の良心の平静と自己の魂の至福について自己自身に責任がある．この意味で，われわれはあるときは神に，あるときは悪魔に，われわれの精神の諸状態の原因を委ねる．われわれのなかには，この二つの世界の所産である謎がある．人間は悪魔に，自己の内部において肉迫する．しかも自己認識に向つて非常に真剣な，そして率直な努力の気持をあらわした吟味的な眼ざしを，その悪魔に向ける．

"Zwar pflegt er nicht zu singen und zu beten,
Doch wendet er, sobald der Weg verfänglich,
Den ernsten Blick, wo Nebel ihn umtrüben,
Ins eigene Herz und in das Herz der Lieben."

W. Meister のこの旅人の祈りは単にゲーテの独自の心術のみならず，遍歴時代の主人公のように，彼の詩の形を特色づけている．それは力強い，自覚的な，自由な道徳性の諸原則であつて，これは Iphigenie において，ゲーテのすばらしい筆致をもつて最高の純粋さ，最高の完全さにまで表現されている．

ところでさきにも述べたように，ゲーテはルターに比較された．ルターが，十六世紀の神学者が到達し得た内的自由の最高の尺度を以て宗教的な闘いをはじめたのに対して，十九世紀の，精神的に最も自由な詩人たちが，彼ルターに対照されるであろう．この十九世紀の，精神的に最も自由な詩人たちは，Sturm und Drang の精神を以て，文学芸術という純粋に精神的な領域に一大改革をもたらした．そしてこの改革は，かのルターの宗教改革が引き裂いた，そして引き裂かねばならなかつたものを再び回復させたのである．国民の生活を，宗教的生活と市民的生活に分けたこの分裂—仲間割れ—は，もしドイツ民族が，宗教的要素がその鋭さ厳しさを失う或る領域，つまり詩の領域で再び出合うということがないとしたら，この分裂はその後いかにして結合の状態に復帰できるかは，全く予測のつかないものとなつたのではあるまいか．しかし国民における宗教的生活と市民的生活との分裂は，詩や文学の助力によつて再び融和されるにいたつた．慰安《Erquickung》を探し求めて今日もまたわれわれは欣んで詩の天国に逗留する．この時代は二つの宗派，すなわち Protestant と Katholik が再び鋭く対立し，一方では「神の恩恵を蒙る人」に悦びあれかしと願い，他方では「側らの迷へる同胞」のために敬虔な祈りを捧げ，輝かしいルター祭を祈祷でかざろうとする．このようなあらゆる混乱，紛糾の上に，最高の

精神の望楼から洞察が自由に，真に解放的な救済的な眼ざしでそそがれる．すなわちゲーテにおいて然りであつた．ゲーテの宗教的世界観は，いかに平和的にいかに温和に，いかに寛大に息吹いていることか！

"Gottes ist der Orient,
Gottes ist der Occident,
Nord und südliches Gelände
Ruht im Frieden seiner Hände"

ゲーテは，少くとも社交上のいたわりを身につけることを痛感した．就中，青年に対してそれに適宜に慣れさせることを痛感した，[4] ゲーテの生涯をみると，シュトラスブルク時代からワイマール時代の初期にいたる青年期は，ルソーイズムの時代といえよう．すなわち，自然と自由，この二つの傾向が最も強く彼を支配していた．作為されたもの，規整されたもの，虚飾的なものに対する嫌悪は，この時代の特徴であつた．ゲーテの壮年時代は，ヘルツォーホの宮廷生活，スタイン夫人，イタリア旅行，フランス革命，自然科学の研究で彩られた．習俗的道徳からのがれようとした青年ゲーテも，漸く三十才に近づくに及んで，外的な社会的秩序を認めるにいたつた．彼の奔放な散文が次第に Reimgedicht, rhythmisches Gedicht に傾いて行つたように，彼の生活も次第に激情より調和的な静かさをもとめるようになつていつた．彼はフランス革命に対しても批判的であつた．彼は革命を，改良への静かな歩みの攪乱者とみなした．また彼の生活を温和に導いた一つの因は，イタリア旅行後，家庭をもつたことであつたろう．この旅行によつて彼は，自然的なものを愛する自然主義より一変して，様式的な古典的芸術の悦びにひたつていた．

一般的にいつて，十九世紀という時代は調和的な教養について多く語られもし，また書かれもした時代であつた．自然は，自分の作つた人間の形成物が欠陥だらけであることに飽き足らず，他の人たちの信頼，期待と歓

びにこたえて，ゲーテという一人の人間に，完全な人間を創造しようと企てているように思われる．ゲーテは自己の作品を通じて，調和的な，あるいは完全な人間を示し，あるいはまた，かつては教育学的に単に要請され，あまりにも高すぎた理想としてとどまつていたものを現実のものたらしめようとする．調和的教育，将来の人間像，これはなお教育的天才を待ち焦がれている．当時は，ゲーテの理想を現実化するということはことさらに困難であつた．人間は，自己のもつ素質と技能の限界内に働くものである以上は，完全でありうるということは恐らく不可能であろう．しかしもし絶対に必要とされたあの調和が欠けるならば，人間の美しい長所というものも曇らされ，破棄され，根絶するにいたるであろう．このような好ましくない傾向は，まだまだこうした思想の動きによくついていけない人たちが多勢いたということである．ある教育学者はいうかもしれない，「そんな時代が来るものだろうか!」と．われわれは躊躇なくそれに答えるであろう，「人間，人類は，たしかに，あらゆる動揺を経て，より一そう完全なものにまで進歩していくものであることを信じている」と．

そこでゲーテ教育学の体系的研究をするに当つて，まずわれわれはそのための材料を集めなければならない．この材料集めに際してわれわれは二重の注意を以て取扱わなければならない．第一は，国民生活に対するゲーテの文化啓発の使命に即して，第二に，まつたくゲーテ自身の個人的関心に即して，この材料集めをしなければならない．ゲーテの教育的意見と業績とをできるだけ完全に，できるだけ体系的に形成するという課題，その学的価値を究明するという課題，その場合にその発展段階をも明らかにさせるという課題，これらの課題が，われわれをして彼の生涯の言行へ敢えて眼を向かせるのである．われわれはこの課題に答えるために，この無限に広い分野の，全く別の諸領域を見廻すことを必要とするであろう．

自然はゲーテにとつて，いわば一切を内包する唯一の書物であつた．し

かし彼にとつて最も興味深いものは，人間であつた．人間は人間にとつて最も興味あるものであり，恐らく他の何ものにもましてそれは人間に関心を起させずにはおかないであろう．われわれを取り巻いている他の一切のものは，われわれの生活上の単なる要素にすぎないか，でなければわれわれが利用するところの道具にすぎない．

この観点のもとに，われわれはまたゲーテの教育学的関心を理解することができる．その関心はゲーテにおいて普遍的人間学的関心であつた．換言すれば，彼が鉱物学を研究したときに，彼はその研究自体を以て満足せず，むしろ鉱物学研究は，地質学の補助科学と考え，且つこれを以て全宇宙究明の出発点と考えていたように，丁度それと同じことが彼の教育学研究についてもいえる．つまり彼の教育学研究の意図は，教育学のために，それを目的として行つたのではなく，あくまでもあらゆる領域をくまなく知りつくそうという彼の認識意欲を満足させるための一つの手段として教育学研究を目論む，ということにあつた．この故に，すでに明らかなように，われわれは，ゲーテにおいて教育学の体系を予想したり期待したりしても無駄である．だがゲーテを客観的に理解しうる立場にあるわれわれは，ゲーテを，その作品によることは勿論，彼を包摂する歴史的，社会的基盤から理解するのでなければならない．そのためには，彼の生活環境というものにとくに注意を払わねばならないであろう．ゲーテの「教育州」(Pädagogische Provinz) が，彼のほかの作品の高みの上に立つていたであろうことは疑いない．彼は教育の問題を追究するに当つて，さきにも述べたように，つねに彼の眼は単に一点を深く見つめるだけでなく，同時に高所から，しかもある一点の高所を移動させながら方々を見廻すという風にして対象の本質を捉えようとした．教育学と相互作用関係にある一切の諸科学はこれみなゲーテの探索の対象となつたのである．

ゲーテは少年の頃は宗教的な疑惑を心にいだいていたが，醇化の火によつて一掃された．また彼は長いこと，国内で静かに限られた狭い範囲内で，

しかし活潑に活動した．その間にあつて彼は医学を勉強したが，彼のその知識は単なる素人の域をはるかに超えたものであつたし，人間研究も根本的なものであり，驚くべき細心さを以つて，主として，人間形態の研究に没頭していた．この研究に対しては，彼は全く驚くほどの根気を示していた．

一方において生来ゲーテは法律家の家に生れた．すなわち父 Johann Kaspar は帝室顧問官であつたし，母 Katharina Elisabeth Textor は Frankfurt a. M. の市長の娘であつた．そして彼自身は父の要望により，ライプツィヒ大学の法律科に入学し，1771年，弁護士を開業している．このころ，すなわち1774年に "Die Leiden des jungen Werthers" が公刊され，彼は一躍 "Sturm und Drang" 時代の代表者として，全ドイツのみならず，全ヨーロッパにまで知られた．また彼が Spinoza の哲学の研究を始めたのもこのころであつた．ゲーテ26才のとき，1775年に，Karl August 候の招きに応じて，ヴァイマールで政治的に公を補佐していたが，その間にあつても，彼は詩作は勿論のこと，解剖学，植物学そしていまも述べたようにスピノザの哲学の研究にも従事していた．実際ゲーテはこうした自己の生活の二面性に非常に悩んでいた．もともと彼は，自分の性格的な好みからいつても，こうした政治面での実践的な活動は気が進まなかつたのである．もつとも彼においては，「遍歴時代」にみられるように，そしてこれはゲーテ自身の教育の社会的背景となつているものであるが，政治的領域の理論的道徳的把握ということは，彼の性向に矛盾するものではなかつた．

ゲーテにあつては，哲学と法とは，それが単に技術的なものにとどまる限りにおいては彼の人間研究と同じ顧慮を以て志向されえなかつた．ゲーテは，単なる技術的知識を摂取するための器官を持ち合わせていなかつたのである．ただ一つのことも，彼の関心はいつもその根底にあるものに向つて，広く且つ深く向けられていつた．だから教育ということを考えると

きでも，彼の関心はその底にひそむ，もつとも根源的なもの，人間の内なる最も本質的なものに彼の探究の眼がそそがれたのであつた．ではなぜ彼はそうした知識を得て，それでもつて教育学の体系を建設しなかつたのであるか．また，なぜ偉大なる彼の同時代者，たとえば Herder や Schiller のやつたような理論的構成を自分も試みてみようとはしなかつたのであるか．この質問ももつともながら，これに対する答も自明である．一般にゲーテが理論を嫌悪したことは周知の通りである．たしかにゲーテも，あちこちで学的な体系を樹立しようとする気持のあることを示しているし，理論づけへの食指を動かすようなモメントを与えたりしている．しかし全体的にいつて，彼の本性，彼の心はそうした形式的なものの抽象的構成に対する才能を持ち合わせていなかつたといつてよいであろう．

若いころからゲーテは，理論的な無駄口，饒舌はそれ自体善悪をともに棄てるもの，つまり角を驕めて牛を殺す類いのものであるとして，これを全くの屑として破棄し，生きた現実へ走つていつた．彼においては，思惟することと行為することは別ものではなかつた．それは人間の呼吸にも比せらるべきものであつた．この傾向は，壮年から老年にかけてのゲーテにも依然生き生きとしていた．そして彼は，その生き生きした直観の泉からのみ一切を創造しつくした．ゲーテは，われわれにしてみれば自然現象の原因を探求しようとするときには，どうしても使わなければならない概念ないし記号であつても，ゲーテは自然科学の領域へ概念を以て踏み込むことに躊躇した．しかもゲーテがこうした態度を示すのは，単に自然研究の場合に限つたことではなく，他の領域での原因追求に当つてもそうした態度を変えなかつた．彼の教育思想を知る上に最も適当と思われる“Wanderjahre”においてすら，われわれは出来上つた理想国家を得ることはできない．ただそのなかの Pädagogische Provinz においていくつかの完成された像に必要なものを示しているにすぎない．ゲーテは広く個々のものをかき集めて一つの理論をつくる必要を全然認めなかつた．この態度は対

象を観察する彼の態度そのものにおいてはつきり現われている．普遍的法則は，物をみる彼の生きた仕方からして結果され，明らかになる．彼の見ること Schauen は，直観すること Anschauen に変ずる．ゲーテはこの直観において，個別的に存在しているものを普遍化し，一般化することができた。

更につづけてもう少し彼における，教育学と自然科学との関係を考えてみよう．

地質学という学問も，ゲーテにおいては自然との生きた交通を通して探究されるべきものであつた．自然の神秘は，チューリンゲンの森を徘徊したり狩猟したり，またその辺りの池や凹みや谷間，滝などを歩き廻るといつた生活を通して開かれる．ゲーテは，地質学を書物のなかからは学ばなかつた．また彼は，同様にして人間というものを心理学から学ばなかつたし，徳というものを Predigt から学ぶ気になれなかつた．従つて教育学の研究に当つても，彼は自己の教育学的経験を机の背後にしまいこんだりはしなかつた．ゲーテの知識は，反省的孤独の中にではなく，現実に働くいろいろの立場にある人たち，いろいろの年令の人たちとの生きた交際を通して，また大自然の芽生えとぢかに接することによつて，あるいはまた川の流れに浮ぶ小舟のなかで，あるいはまた郵便馬車のなかで得られた知識であつた．ある哲学体系を基礎とした無味乾燥な教訓的な教育学の論文などというものは，ゲーテにとつては存在しないも同様であつて，全く無価値な，無意味なものであつた．しかしわれわれは，ゲーテの自然な，新生な精神に，理論の塵をつけたわれわれの精神を近づけることが許されないだろうか，

われわれは人間の自然のなかに根をもつている欠陥のあることを告白しないわけにはいかないであろう．しかしゲーテが，多くの対象を，ある平明な関係において理解しようと努め，そのためになんらかの仮設，術語，あるいは体系(たとえばスピノーザ哲学など)に傾倒することがあつたからと

いつて，われわれは一概に彼を非難することはできない．ゲーテにおいては，仮設とか術語とかいうものは，それ自体としては決してその語によつて代現されているその対象を，如実に，全体的に完全に表現しうるものではなかつた．それはむしろ逆にその対象を制限的に表現するものでさえある．その限りにおいて仮設とか術語とかいうものは，有限的・制限的の意味しかもつていない．われわれも，この意味においてゲーテとともに，人間の把握に努めなければならない，そしてそこにまた人間のもつ，人間の本来的の欠陥，弱さというもののあることを認めざるをえない．理論はそれ自体としては諸現象の関連をわれわれに信じ込ませること以外には何ら有用ではないといえるかもしれない．しかしそのためだけにつていも，われわれは，有限的な術語を用いてその関連を表現するしかやりようがないわけである．体系的説明，関連ある内容の術語的表現，これらはその一面性の故にゲーテの最も嫌つたものである．しかしそのゲーテを捉え，これをより正しく理解するために，われわれはゲーテの嫌つた術語を用いなければならないということは何という皮肉なことであろう．われわれはゲーテの教育的見解の学的価値を明らかにしようと思えば，何としても理論的・批判的考察の立場に立たざるをえない．この関連を検証し，できる限り完全な関連的像を，平明に表現し基礎づけることがわれわれに課せられた使命でもあろう．

われわれはこの目的に到達するために，分析的方法をとり，散在している思想の全領域にわたつて，ゲーテの思想の出所をつきとめながら，これら散在せる思想の真珠玉を一連の鎖につらね，組織的にまとまりのある思想にまで高めるよう努力するか，あるいは，綜合的方法で，彼の哲学的世界観の一つの結果としての教育的見解を明らかにするか．このいずれの方法，いずれの途をとるのがわれわれの所期の目的を果すのにより妥当であるだろうか．このいずれもわれわれの目的達成には役立たないように思われる．後者の行き方は，純粋に伝記的に進むこと，時間的経過のなかで展

開することを強要するもののようであるし，前者の場合に懸念されることは，純粋に事実的の観点に立つてゲーテの全思想を一つの系統ある全体として編成するといつても，やはりその調査の照光のなかに入つてこない要素，しかもあるいは重要かもしれない要素がありはしないか，それが調査の網からもれてしまつてはいないか，ということである．時間的経過へのなかで捉えるといつても，実際には，真の全体生命も，切れ切れにしか捉えられてこなかつたということになりはしないだろうか．

かくてこの両者の中間の道を，否むしろこの両者を統一した道を見出すのが妥当であるように思われる．われわれはゲーテの教育思想の発展においては綜合的に，その固有の教育学の説明においては分析的に研究を進めていくのが妥当であろう．しかしその場合，ゲーテが教育に関する自分の意見のなかに示した発展の道程もできるだけ明らかにされるように，彼に関連する一切を時間的秩序のなかで位置づけていくことが肝要であろう．

しかしゲーテの教育思想を歴史的発生的に究明しようとする場合には，逆に，できるだけ事実上の関連を保持するように心がけなければならない．それにしてもくれぐれも肝に銘じておかなくてはならないことは，自分の恣意で資料を集めたり位置づけたりしてはならない，ということである．資料はそれ自体としては客観的であるかもしれないが，いかなる資料を，いかに配列するかによつて歴史の意味が変つてくることを思えば，この点はよく注意しなければならない．歴史における真実，自分に好意を寄せる資料には歴史の脚光を沿びせて好意的に際立たせ，その他の資はあまり非難されない程度に適当に配列してみたり，自分の好まぬ資料はまるで暴君の下にある家来のように，しいたげられるようであつてはならない．前にも述べたように，既成の哲学に制約されず，自分の考えを自分のなかから自然に即して生産し，そこに彼の思想を形づくつていつたゲーテ，このような生活即自然即思想をその生涯の特質とするゲーテの教育思想を正しく，彼自身に即して捉えようと思えば，いかなる意味においても，あの専制君

主的な態度を排斥しなければならない．敢えて重ねて強調するならば，ゲーテの思想の最も顕著な特徴の一つは，それが生きたものだということ，言葉の真の意味において有機的であるということである．

ここに有機的であるということは，一般にいうところの体系的ということを全く排するというのではないが，それよりももつと生き生きとした力のあるものである．哲学の体系とかいう風に一つのまとまりのある，秩序整然とした形をそなえている一つの全体というものは，有機的であることもありうるが，場合によつては有機的となつていない，あるいはなりえないこともあるであろう．

いろいろの人の思想をただ外見上美しく配列して一つの形にまとめたものには，形式上の美というものがあつても，それらを貫く作者の生命，魂というものが通つていなければ，それは真の意味で有機的ということはできないであろう．ゲーテは学としての体系的な哲学を，また教育学をもつ人ではなかつた．しかしこれは逆にいえば，彼があくまで生命の人，あくなき創意と新生な心情によつてその生涯を貫いた人であることの証左でもあるであろう．これは，言葉の真の意味で生活を哲学したということであろう．ゲーテの詩や劇や小説は，すべて彼の生活の告白であり，従つて彼の思想もまた彼の生命の内からの声であつた．ここに生活とは，いうまでもなく彼の内面的生活を指すものであつて，広い意味で「かくあらねばならぬ」と考える生活の理想をも含むものである．その生活の態度が，言葉の形式をとつて表現されたものが彼の思想なのである．

このように考えるならば，彼の生活の外に存在する学的体系の形をとることはできなかつたのは当然であるし，またそうする必要はなかつたわけである．彼はいつも生命の法則に従つてその天賦の創造的才能のおもむくままに，意識して創作の生活をなさんとするのでなく，全く自然に，そしていつも生命全体をもつて感じ，行い，生産していつたのである．それは丁度，健康な身体や若々しい生き生きした木が，みずからその有機的生命

的健全さを意識しないでも，自然にその健全さを外部にあらわし，発展させ，またやがて自然に木の実がおのずから熟して落ちるように，自己の創作を生産し，発表するというようになつていつたのである．ゲーテの作品は，まさにこのような彼の内面生活の自然の発露としてなされたものである．そこに支配するものは，既成の思想体系でもなくまた既存の慣習でもない，ただあるものは彼の生命を貫く生命の法則のみであつた．ゲーテの思想は，まさに彼の生活の樹に咲いた花であり，生活の樹になる果実である．それは必然的の結果である．しかし必然的といつても決して放つておいてもひとりでにそうなる，という意味での必然ではなく，つねに自己を厳しく省みる真剣な生活態度にもとづく必然性，自然性の謂いである．静かに立つている樹木は，いかにも安らかにみえるし，それがやがて花をつけ，果を結ぶにいたるも，その間なんの変哲もないようにみえるけれども，しかしそこにいたるまでは，実に多くの苦難，風雪に耐えてきたことを忘れてはならない．

ゲーテの有機的・生命的な天才から生れる理念は，あるいは極めて刹那的，一時的な思い付きのようにもみえるかもしれないが，この「ひらめき」的な産物は，実は深い長い生活の流れからその水脈を引いているものであつて，われわれの眼に触れてくるものは，その表面の波頭のようなものにすぎない．その底は無尽の生命に通じている．彼の思想は，この意味において，刹那的にして且つ永遠のものを象徴しているといえよう．

わたくしが好んで用いる表現だが，その人の世界観は，その人の行動の尖端に現われる．まさにそれは氷山の一角にも比せられるであろう．有機的なるべき世界観は，固定し静止していない，それはつねに働き，外部へ発現しようとする．従つてこの場合ゲーテにおいて有機的であるという意味は，活動的行的であるとともに反省的であり，刹那的にして永遠性を有し，断片的でしかも持続性をもつたものであり，一見体系的性質から最も遠ざかつているもののように見えるが，その実最も直接的に有機的生活そ

のものを表現する，という意味である．それ故に彼の思想に接し，彼の言葉に耳を傾けんとする者は，必ずやその有機的生命的性質に十分注意し，彼の言葉の背後に流れている一貫して絶えることのない，彼の内面生活を見なければならない．そうすれば，彼の生涯，彼の思想は，一つの生きた体系としてわれわれの眼の前にはつきり姿を現わしてくるであろう．そして彼の言葉は，その体系を説明する最も雄弁な，明白な要素として捉えられてくるであろう．従つてゲーテを真に理解しようと思うならば，彼の思想を，彼の生活の有機的生命的体系に還元して，彼の言葉から一つの思想体系を導き出してこなくてはならない．そこにまた彼自身の哲学を，そして教育学を見出すことができる．

註（1） ハイネマン「ゲーテ伝」岩波文庫第一巻参照．（大野像一訳）

（2） ゲーテに関する著作を数種あげれば Mpngsaphie として，

Gregorovius: Goethes Wilhelm Meister in seinen sozialistischen Elementen. Königsberg 1849.

Jung: Goethes Wanderjahre und die wichtigsten Fragen des 19 Jahrhunderts, Mainz 1854.

Karl Grün: Über Goethe vom menschlichen Standpunkt, 1846.

Karl Rosenkranz: Goethe und seine Werke, 1847.

Oldenberg: Grundlinien der Pädagogik Goethes, Zittau 1858.

Marz: Goethe als Erzieher, Lichtstrahlen aus seinen Werken. Leipzig 1864.

Eiselen: Goethes Pädagogik, Vortrag, Frankfurt a. H. 1881.

Hacker: Erziehungsgeschichte Goethes in pädagogischen Studien. Erlangen, 1874.

Langguth: Goethes Pädagogik, Halle, 1886.

（3） Adolf Langguth: Goethes Pädagogik, Max Niemeyer 1886, S. 8.

（4） "Unterhaltungen deutscher Ausgewanderter," Goethes Werke XVI, S. 38. Berlin Hempel.